



日本藻類学会 学会賞（特別賞，学術賞，第 21 回研究奨励賞， 第 28 回英文誌論文賞，第 1 回和文誌論文賞， 第 49 回大会学生発表賞）

【日本藻類学会 学会賞 受賞記念特集】

日本藻類学会第 49 回大会（沖縄）において，2025 年 3 月 22 日（土）に特別賞，学術賞，研究奨励賞，英文誌論文賞，和文誌論文賞の授賞式が，3 月 23 日（日）に学生発表賞の授賞式が行われ，受賞者と受賞論文が発表された。各賞の概略的な内容と選考方法については日本藻類学会のウェブサイト参照されたい。特別賞（岡村賞）が奥田一雄氏，学術賞（山田賞）が藤田大介氏，研究奨励賞が鎌倉史帆氏と関荘一郎氏，英文誌論文賞が Arai *et al.* の「Field survey of the phase and sex ratios of the brown alga *Dictyota dichotoma* (Dictyotales, Phaeophyceae) using sex-specific molecular markers. Phycological Research 72(2): 123–132, DOI: 10.1111/pre.12544」，和文誌論文賞が貞包らの「同形世代交代型紅藻ツノマタ属 2 種における生態と物理特性の世代間比較. 藻類 72(3): 157–163」であった。学生発表賞は，口頭発表の大型藻の部が鶴亀里咲氏，微細藻の部が城間尚氏，ポスター発表は大型藻の部が植木理子氏，微細藻の部が中村翠氏と森本冬海氏であった。

日本藻類学会特別賞（岡村賞）を受賞して

奥田 一雄（高知大学名誉教授）

このたびは私に日本藻類学会特別賞（岡村賞）を授与していただきましてまことにありがとうございます。今回このような名誉ある特別賞（岡村賞）を賜り，私自身，大変光栄かつ誇りに思っているところです。日本藻類学会そして学会員の皆さま方に対し，心から深く感謝とお礼を申し上げます。

ところで，私は 1978 年に日本藻類学会に入会して以来，今年 2025 年で 48 年目となりました。私は藻類学会の中で，駆け出しの大学院生のときから若手，中堅へと年齢・キャリアを重ねていく間に，尊敬する先生や諸先輩方をはじめ多くの素晴らしい同僚研究者と出会い，たくさんのご指導・ご鞭撻をいただきました。私は日本藻類学会から数々の恩恵を受けつつ，それと同時にこの日本藻類学会によって育てられてきました。つまり，私の研究者としてのアイデンティティを実現するためにはなくてはならない人々との出会いと場，それが日本藻類学会であったのではないかとつくづく実感しています。

今回の日本藻類学会特別賞（岡村賞）受賞に関し，和文誌

編集委員会の芹澤和世さんから寄稿のご依頼をいただきました。この機会に，私が藻類の道へ進むことになったいきさつを，非常に個人的な内容となりますが，まずは思いつくままに回想しました。後半では，私が藻類学会の英文誌の副編集長と編集長を務めていた時期の思い出を，これもかなり自己中心的な視点から見た内容となりますが，記述させていただきました。

私は神戸大学の 2 回生の後期に教養部から理学部生物学科へ無事（落第せず）に専門移行し，「藻類学総説」を著された広瀬弘幸先生による通年 4 単位必修の「系統生物学」を受講したことで，藻類という生物の存在をはじめて認識したのではないかと思います。臨海実習では，海藻標本作製の最中，出し抜けにひょいっと広瀬先生が実習室に入ってきて，標本用紙の上でまだ水切りしている海藻を指さしながら，これはマクサでこれはアミジグサなどと次々にぱっぱと歩きながら名前を付けていかれるので，学生は不意を突かれて鉛筆書きが追いつかないくらいでした。

卒論分属のとき，広瀬先生はその年度末に定年退職されましたが，私は漠然と系統学教室を希望していました。しかし，黄金色藻の高橋永治先生と，淡水紅藻と珪藻遺骸の熊野茂先生の研究室はいずれも学生に大人気で，すでに満席。結局，淡路島の岩屋臨海実験所におられた榎本幸人先生にお願いし，私の卒論指導を引き受けていただきました。このことは，結果的に私が藻類の道へ進んでいく大きな選択となりました。

4 月から私は修士 1 年生の奈島弘明さんと一緒に本部六甲台から離れた臨海実験所で自炊し，寝泊まりする生活を始めました。榎本先生は実験所の敷地内にある官舎で奥さまと一緒に住まれ，食事と睡眠をとられる以外は実験所で研究されていました。それゆえ，2 人の学生はほとんど四六時中榎本先生と顔をつきあわせ，研究面だけにとどまらず生活面や人生観にまでわたる多種多様な指導を受けている状況でした。



私の卒論テーマはミドリゲ目多核緑藻キッコウグサの生活史に関する研究でした。6月に奈島さんと一緒に奄美大島へ行って採集してきたキッコウグサを生きたまま実験所に持ち帰りました。さっそくキッコウグサを粗培養すると、数日で遊走細胞を放出したので、その遊走細胞の雌雄性の有無や鞭毛の数などを顕微鏡で観察・撮影・スケッチしました。また一方で、走光性を利用して分離した遊走細胞を培養しました。私は榎本先生がされることを全部見よう見まねでそのままフォローし、手取り足取り一つひとつの手技とその理由、意味を教えてくださいました。私にとってそれら個々の実験と理に適った手技・技法はとても新鮮に感じられ、しかもそれを実体験したことで私の知的好奇心はよりいっそうかき立てられました。

卒論の目的は、生殖、発生、成長、形態形成を含むキッコウグサの生活史を培養によって明らかにすること。生活史を単に世代交代のタイプ分けというような狭い意味で捉えるのではなく、キッコウグサの生き方全体をつぶさに理解するという研究視座を榎本先生から学びました。たとえば、同型世代交代において、雌雄の配偶子から単為発生した個体と、接合子または遊走子から発達した個体との間に形態的・生理的差異が生じるのだろうかとか、雌雄の配偶子は光の方向へ泳ぐが、それらが接合して接合子になるやいなや光と逆の方向へ泳ぎを反転させるのは、細胞構造の変化か、もしくは光の異なる因子が関与するのだろうか、などと問うのです。このような問題意識を持てたのは、温度や光、栄養塩の組成などの条件を任意に設定し、海藻類を長期間培養する技術的な基盤がそのころに確立されてきた背景があったと思います。このような生物現象やものごとの捉え方は私自身の研究スタンスと発想法に大きな影響を与えました。そして現在に至るまで、私は培養を基本に藻類の成長と分化、形態形成に関わる構造要素および生理学的特性を明らかにすることに興味を持ち続けているのです。

ところで、榎本先生はそのころ堀輝三先生と多核緑藻の核分裂や生殖細胞の微細構造について共同研究されていました。両先生のそのような関係から、榎本先生は私と奈島さんを連れて1週間ほど東邦大学に滞在し、そこで堀先生から電子顕微鏡の試料作製法を逐一教えていただきました。キッコウグサの細胞の固定、脱水、樹脂包埋、そして超薄切片の作製と電子染色、電子顕微鏡観察と撮影、フィルム現像・印画紙への焼き付けまで、行うべき処理と段階があまりにも多くて細かい作業ばかりであることに驚きました。なお、堀先生の隣の研究室には吉崎誠先生がおられました。吉崎先生の卒論生らが顕微鏡観察しながら黙々とスケッチしていましたが、その図を見せてもらおうと、紅藻類の果胞子体発達の種々の段階における各細胞の配置と連結が三次元的にかつ非常に精緻に表現されており、まるで芸術作品のようだと思いました。

さらにまた、筑波大学下田臨海実験所の横浜康継先生を訪ね、キッコウグサの光合成を測定させていただきました。暗室の実験室内では、光源のスライドプロジェクターとプロダ

クトメーターを一对のワンセットとしてテーブルに一直線上に配置し、両者間の距離を調整してプロダクトメーター上の試料に照射する光量を設定できるようになっていました。実際の実験では、それぞれ異なる光量に設定した上記のセットを複数列平行に並べ、それらを同時に稼働してキッコウグサの光合成を測定しました。そのようなすこぶる合理的で効率的な方法が考案・実現されていることに感服しました。

卒論研究の約1年間にあったこのような数々の濃い楽しい経験をもとに、私は大学院への進学を決心しましたが、すでに大学院の試験は終わっていました。それで榎本先生に相談してアドバイスをいただき、神戸大学を卒業後、まず研究生として北海道大学理学部に入学し、室蘭にある同附属海藻研究施設(海藻研)で約半年間受験勉強をすることになりました。海藻研には、施設長の阪井與志雄先生、館脇正和先生、笠原和男先生、1名の事務官と2名の技官、そして博士課程の3人の大学院生、渦鞭毛藻の内田卓志さん、付着珪藻の水野真さん、褐藻の嵯峨直恆さんがおられました。その秋、無事に大学院の入学試験に合格したことを機に、私は1978年から藻類学会へ入会しました。

修士課程に入学すると、私はそのまま室蘭の海藻研にりましたが、札幌の植物分類学教室にいる川井浩史さんとは同期でした。その翌年には、修士1年生で本村泰三さんが海藻研に入ってきました。奇しくも川井さんと本村さんと私の3人は同い年(生まれた年度・学年が同じ)だったのです。修士課程では、私は館脇先生の指導の下で緑藻ニセハネモ属の1種の生活史と配偶子形成の制御機構に関する研究をしました。ちなみに、館脇先生と榎本先生のお二人は北大理学部植物学科の同期生でした。私が藻類の道に進んだ(大学院生になる時点までの)きっかけは、概ね以上のような経緯でした。

その後の私は博士後期課程2年生を終えて高知大学に採用され、細胞壁の構造と形成に関する研究へと移行しました。1990年から2年間は米国テキサス大学オースティン校のDr. R. M. Brown, Jr. の研究室でセルロースの *in vitro* 合成について研究しました。同校の植物学棟には *Volvox* と UTEX の Dr. Richard C. Starr がおられ、近くの池の端でパンをちぎって魚に給餌されているのをよく見かけました。

一方、そのころの藻類学会では、学会の活性化のため、改革ワーキンググループ等で活発な議論が行われていました(Jpn. J. Phycol. 41: 180-181, 1993)。そこで出てきたいくつかの企画・提案、たとえば、学会予算の収入増のための藻類グッズ製作・販売など、がすでに実行されつつありました(Jpn. J. Phycol. 42: 456, 1994)。かくして藻類学会は、学会誌の国際化という目標を実現するため、1995年に英文誌 *Phycological Research* (PRE) をブラックウェルという学術出版社から発刊しました。これにより藻類学会の学会誌に係る予算の多くはPREのために支出されるようになったので、同時に新たにスタートした和文誌「藻類」の出版は、限られた予算の中で様々な工夫がなされながら、もっぱら和文誌編集委員会委員のボランティア活動によって支えられました。それだけに、創生

当時の PRE は、藻類学会からの大きな支援と期待に応えるべき責任と成果が望まれていました。

私は 1997 年から PRE の副編集長を 6 年間務めた後、2003 年から 2006 年までの 4 年間 PRE の編集長に就任しました。私は懸案事項であった PRE のインパクトファクター (IF) 獲得に取り組みました。なぜなら、IF のない学術雑誌に良い論文を投稿してくれる研究者は実際上非常に少ないからです。そのような状況にもかかわらず、前任の川井、本村両編集長をはじめ、副編集長や他の藻類学会員からも国内外の研究者に向けて粘り強く PRE への投稿依頼を継続しました。それに加え、ブラックウェルは国際学会での PRE の宣伝活動や、PRE 掲載論文の関連雑誌への引用回数を含む独自の調査と広報活動等を続けてきました。PRE の発刊以来行ってきたこのような地道な取組は、IF 獲得のための申請に必要かつ有効でした。2004 年 1 月に、私は PRE の目的、歴史的背景、編集体制、著者・出版実績、国際学会誌としての評判・引用情報などを記載した資料とともに、Thomson ISI の Ms Marion Gloninger 宛へ PRE を ISI Current Contents に登録するための申請を行いました。そのときに推薦書を書いていたのは、国際藻類学会会長・Protist 編集長の Dr. Michael Melkonian、European J. Phycology 編集長の Dr. Christine A. Maggs、日本植物学会会長の黒岩常祥先生、カリフォルニア大学バークレー校の Dr. Paul C. Silva、メルボルン大学の Dr. John A. West でした。Thomson ISI による半年余りにわたるレビューの結果、2004 年 8 月に待ちに待った申請受理の連絡があり、2006 年について PRE にとって初の IF が出たのでした。私は発刊 11 年目にしてやっと PRE が本当に国際学会誌となったという認識を持つことができ、感慨無量でした。IF 獲得のため、ブラックウェルの松永理乃さんと Ms Katie Julian に大変尽力いただきました。私の任期中、お二人には PRE の用紙価格と郵送費の低減につながる印刷紙の選定や duotone 印刷の維持、ページ超過分の減額などで多々お世話になりました。近々 PRE の冊子体がなくなるという由、私が PRE 編集長をしていた頃とは隔世の感があります。

さて最後の話題は、私が PRE の編集長になる前の副編集長時代にあったことです。前述のように、当時は藻類学会を活性化するいくつもの取組・活動が行われており (Jpn. J. Phycol. 43: 191, 1995)、その一環として、藻類学会の会員が中心となって毎年 1 件ずつ植物学会でのシンポジウムを企画・実施することになっていました。私は予期せず川井さんからすると 2001 年の植物学会はよろしくと依頼されました。多分 2000 年の藻類学会が植物学会の時だったと思いますが、その不意打ちにうかつにも私はおもわずふわっと引き受けてしまいました。それで、私は神戸大学理学部生物学科同期の田畑哲之さん (かずさ DNA 研究所) と 2 人でオーガナイザーとなり、日本植物学会第 65 回大会において「ゲノム時代の細胞外被研究の方向性を探る (JPR Symposium: Toward genomics in cell-covering research)」というタイトルでシンポジウムを組みました (J. Plant Res. 115: 269–307, 2002)。発表

者は順に、田畑哲之さん、保尊隆享さん (大阪市立大学)、私、真山茂樹さん (東京学芸大学)、木村聡さん (東京大学)、西谷和彦さん (東北大学) でした。シンポジウムは成功裡に終わり、私は無事に約束が果たせて心底ほっとしたものです。

このたび、私は日本藻類学会特別賞 (岡村賞) を 70 歳で受賞しました。この記事を書かせていただいたことで、1 つは私が藻類の道を選ぶきっかけとなった卒論生 (22 歳) のときに経験した色々なできごとを懐かしく思い出すことができました。そして 2 つ目は、自分では藻類学会のために少しは役に立てたのではないかと思える PRE の副編集長と編集長 (43–52 歳) のときに行った活動の一部を記録できました。この記事の執筆中、藻類学会で出会ってつながり、ご教示いただいた多くの方々の姿と交わした言葉等がそのときの状況とともに次からつぎへと脳裏に浮かんできました。それらの大切な記憶を心にしっかりととどめ、今まで長きにわたりお世話になってきました日本藻類学会とその藻類学会を熱意をもって支えてきた多くの先輩・同僚会員諸氏のご努力に対し、あらためまして感謝とお礼を申し上げます。最後になりましたが、学生や若手、中堅の研究者が夢中になって独自の研究を切り拓き、それらの活動が連携・競い合いながら幾重も併走することにより、この日本藻類学会が益々盛り上がり、さらに発展していくことを心からお祈りいたします。

日本藻類学会学術賞 (山田賞) を受賞して

藤田 大介 (海藻資源リサーチ)

この度、栄えある日本藻類学会学術賞 (山田賞) を授与していただきました。身に余る光栄です。ご推挙、御審議いただいた先生方、そして、これまでご指導いただいた先生方や先輩方、研究を支えていただいた学生諸氏、官公庁や企業の関係各位に厚く御礼申し上げます。私は学生時代よりこの学会に育てていただきました。受賞会場でもお話しましたが、これまでの歩みを簡単に書いておきますので、ご笑読いただければ幸いです。

私が本学会に入会したのは北海道大学水産学部 (函館市) の 3 年生の時、翌年、水産植物学研究室に入り、大学院にも進学し、正置富太郎先生のご指導の下に磯焼け域に優占す



る無節サンゴモの研究をしました。正置門下でサンゴモを研究した院生8人(珊瑚藻八犬士!?)の中では最年少で、能登谷正浩、宮田昌彦、馬場将輔、Vithya Srimanobhasの各氏と1～数年間を共に過ごし、良き先輩に恵まれました。能登谷先輩には培養、宮田先輩には走査型電子顕微鏡、馬場先輩やVithya先輩には海藻の分類を教えていただきました。

大会に初めて参加したのは学部4年時の筑波大会で、それ以降、他大学の先生や先輩とも出会い、微細藻類や淡水藻も含め、藻類の面白さや見方、研究方法を広く学ぶことができました。当時は1会場で大形藻も微細藻もやっていたのが非常に良かったです。修士課程の時には中国の青島で開催された国際海藻シンポジウムに参加し、海外の研究者や参加企業の方々とも交流が始まりました。また、これを機に高知大学の大野正夫先生に大変お世話になり、先生の行動力やホスピタリティに大きく感化されました。

博士課程の後半からフィールドに近い江差町に寝床を借りて学習塾を開き、高校や看護学校の非常勤を勤めました。研究室に閉じこもるのが性に合わず、磯を歩き、海に潜り、漁業者、漁業協同組合、種苗センター、水産改良普及所、道立水産試験場、町役場、支庁(現振興局)、北大理学部などを訪れ、調査に同行し、現地の宿で夜な夜な議論し、流水水槽を借り、古い文献や航空写真を閲覧し、分類の知識を深め、当時の人脈には後々まで助けられ、私の一番の財産となりました。博士号取得後もそのまま気楽にやっていたのですが、やはりきちんと研究職を得て・・・と論じて下さったのが津軽海峡の調査のために道南を訪れた国立科学博物館の田中次郎先生、具体的に2つの就職先で悩んだ時に親身に相談に乗って下さったのが北大理学部の川井浩史先生でした。

富山県水産試験場に就職し、藻場や磯根資源、海洋深層水などの担当となり、共同研究も増え、高知大学JICA研修コースや富山大学の非常勤講師も経験し、忙しいながらも楽しい毎日でした。藻類学会との関わりでは、北海道大学の吉田忠生先生、増田道夫先生、神戸大学に移られた川井浩史先生には海藻の同定をご指導いただき、本村泰三先生には研修でお世話になり、東京学芸大学の真山茂樹先生には海底磯の珪藻、日本歯科大学の南雲保先生や青山学院高校の鈴木秀和先生には海洋深層水中に出現する珪藻を同定していただきました。この頃若手を中心に進められていた学会改革も手伝い、40周年記念(藻類40巻4号)に寄稿したほか、富山医科薬科大学の濱田仁先生、富山大学の渡邊信先生とともに富山大会を開催し、記念誌「富山の藻類」を出版しました。学会創立50周年記念出版「21世紀初頭の藻学の現況」には磯焼けの項を執筆しましたが、これがかなり引用されました。学会では和文誌編集委員を務めました。その後、県優良職員になり、海外視察や国際学会にも行けました。なお、富山では、戦後まもなく「富山湾の海藻」を著された大島勝太郎先生に度々お世話になっていたのですが、先生はその昔岡村金太郎先生に師事されていたので、私は年齢不相応ながら「岡村の孫弟子」になりました。

しかし、県職員の定めで、12年目に行政職に異動となりました。行政の仕事は研究よりも即効で漁業者の損得に繋がり、やりがいのある仕事もありましたが、自分が納得できない藻場埋立地の仕事もあり、研究できない寂しさも感じました。ストレスの多い県庁生活の昼休みには自転車を乗り回していましたが、ある日、環水公園で淡水赤潮の発生に気が付き、顕微鏡で採水を観察したところ、活発に動き回る渦鞭毛藻を確認しました。このサンプルは北海道大学の堀口健雄研究室で詳細に研究され、共著にして下さった論文が後にTyge Christensen賞を受賞しました。その後、長崎県島原市で開催された会議に出張した帰り、北大理学部出身で同い年の飯間雅文先生(長崎大学)を訪ねて大学での研究生生活の話を聞き、励まされ、転職を目指すことにしました。無責任と思われるかもしれませんが、しばらく前に北大の後輩をポストドクで引き受け、海藻の培養を担当してもらっていたので後任のアテもあったのです(実際、数年後に正規採用されました)。

翌年、ご縁があって東京水産大学(半年後に国立大学法人化とともに東京海洋大学と改名)に移り、初代の岡村先生から数えて5代目の教員になりました。所属した応用藻類学研究室では5年間、同窓の能登谷先生と共に過ごしました。その後、実質的に1人で研究室を運営する期間が長かったのですが、隣の研究室には田中次郎先生がおられ、後に鈴木秀和先生や神谷充伸先生も来られ、フィールドの好きな学生にも恵まれ、昨年3月、21年間の教員生活を終えました。多い時には1人で20余人の学生を受け持ちましたが、後に北海道大学に移った秋田晋吾博士をはじめ、優秀な先輩学生諸氏に大いに助けられました。海外の研究者が訪れるたびに学生たちと手作りの海藻パーティーを催し、学生実習の一部を公開の磯焼け講習会(全国豊かな海づくり推進協会と共催)とするなど、大野先生流の研究室運営で楽しく過ごしました。卒業生(90名、副指導を入れると100余名)には関連分野の公的機関や会社に就職された人も多く、数カップルが生まれました。

大学在職中は、水産庁や地方公共団体、水産関連団体の藻場・磯焼け関連の委員を数多く引き受け、多くの企業と共同研究をさせていただきました。特に「磯焼け対策ガイドライン」(水産庁)や「磯焼け対策シリーズ」(全3巻、成山堂書店)などの執筆・編纂は貴重な経験となり、前者は日本水産工学会技術賞を共同受賞しました。また、海外の優秀な若手研究者との交流を進め、これまでとは違う視点の論文にも加わることもできました。日本藻類学会でも、評議員、英文誌編集委員、第32回東京大会の実行委員長(公開シンポジウム「藻場を守り育てる知恵と技術」も開催)、第45回東京大会(オンライン)の大会長を務め、第35回富山大会では公開シンポジウム「富山県民のための昆布学」を開催し記念誌を発刊しました。藻類学会初のオンライン大会では多くの器用な若手会員に助けをいただき、不器用な私は名ばかりでしたが、茨城大学の阿部信一郎先生が私の磯焼け研究にちなんだ大会ロゴマークを描いて下さり、とても嬉しかったです。

今回の学術賞(山田賞)で特に嬉しかったことが4つあり

ます。1つは賞に名前を残される山田幸男先生が磯焼け研究に取り組まれた先達であったこと、2つ目は高知でしばしば酒を酌み交わしていた奥田一雄先生の岡村賞受賞と同時だったこと、3つ目は研究室の先輩で上司でもあった能登谷先生の岡村賞に続けたこと、そして4つ目は、第32回東京大会でワークショップ「海藻と付着性微細藻（珪藻・藍藻・渦鞭毛藻・ハプト藻・鞭毛虫）」（同様の企画は翌年の沖縄大会でも実施）を共同企画した河地正伸会長から思い出の沖縄で授与されたことです。学会HPで学術賞受賞者リストをみると錚々たる先生方ばかりなので気恥ずかしくもなりますが、1つ気が付いたのは、ほぼ全員が出身大学を出て別の場所で活躍されていることで、それは私も当てはまるのかなと思いました。国内では「大学に残る」ことが普通だった時代もありますが、欧米では全くないので、大学院を修了されたら別の場所に出で自分を磨かれる方が遥かに多いと思います。

私自身、高校教員や行政も含めて多くの経験を積むことができただけでなく、学生時代から関心を払ってきた磯焼けとその対策をライフワークとし、比較的バランスよく方向性を見出して様々なアプローチを試し、関連分野に人材を送り込むことができたこと、海外との交流を通じて日本の知見を広く知らしめることができたことは良かったと思っています。その中で心掛けてきたのは「研究は地域社会と共に」で、学生を終えた頃にまとめた小冊子「追分ソーランラインの海藻」の前書きに自ら書いた言葉ですが、正置先生が結婚式の祝辞の中で私の信念として紹介して下さいました。これだけは有言実行で、可能な限りフィールドに出向き、自然と向き合い、そこに関わる人たちとのコミュニケーションを大切にしてきました。研究室という殻に閉じこもり論文を書くだけで「研究栄えて産業滅びる」ような状況になれば、研究そのものが支持されなくなります。特に、水産系の研究室は藻類を扱うだけでなく海や漁業者と向き合える人材の育成が望まれています。日本藻類学会は、藻類という興味の尽きない生物群を基軸とし、理学、水産、その他の応用分野にまたがる素晴らしいネットワークですから、ここでの出会いを大切に、大いに語らい、飛躍していただきたいと思います。北大の学生時代の副指導教員だった藪熙先生は「共に伸び（呑み？）、共に栄えよう」という名言を残されました。

退職後は、形ばかりですが個人事務所を立ち上げ、（公社）全国豊かな海づくり推進協会の技術参与や（一社）水産土木建設技術センターの専門技術員などの肩書をもらって各地で活動させていただいています。今年は能登半島沿岸震災影響調査やウニ養殖・輸出プロジェクトに関する仕事も入り、昨年より忙しくなりそうですが、時間を見つけては趣味も兼ねて漁港巡り（植生観察）に勤しんでいます。今しばらくできることをやりながら学会にも顔を出そうと思っていますので、今後ともよろしくお願いします。どこかの海、どこかの漁港でお会いしたら、気楽にお声がけ下さい。学会と学会員の皆様の今後ますますの発展を祈念し、次世代の藻類学を楽しみにしております。

第21回日本藻類学会研究奨励賞を受賞して

鎌倉 史帆（奈良女子大学共生科学研究センター）

このたびは、第21回日本藻類学会研究奨励賞を賜り、大変光栄に存じます。このような賞を頂くことができましたのは、ご指導くださった先生方や共同研究者の皆様をはじめ、さまざまな形でお力添えをいただいた多くの方々のおかげであり、心より感謝申し上げます。特に、ご推薦いただいた福井県立大学大学院在籍時の指導教員である佐藤晋也先生には、大変お世話になりました。佐藤先生には、研究室に配属された学部3年生のころから博士課程修了まで、何度もご迷惑をかけたにもかかわらず、いつも変わらずご丁寧にご指導していただきました。そして、奈良女子大学で非常勤研究員として勤務している現在も、あらゆる面で支えていただいております。ありがとうございます。

博士課程在学中は、他の博士学生が少なくほとんど出会う機会のない環境で研究に取り組んでおりました。その中で、研究室の吉川伸哉先生および山田和正先生には常に温かくご指導いただき、大変心強く感じておりました。研究に一生懸命取り組む後輩学生の存在も励みになりました。また、博士課程の3年間は、新型コロナウイルスの流行とちょうど重なっておりました。そのような特異な状況において、日常の些細な出来事について、以前に増して連絡を取り合ってくれた友人たちにも深く感謝いたします。私がたいてい健やかに研究を続けることができたのは、周囲の支えに恵まれていたからにほかなりません。

私はこれまで、珪藻を対象として、培養実験を通じた研究を行ってきました。修士課程では、羽状珪藻 *Epithemia* において、この珪藻が細胞内にもシアノバクテリア共生体が、珪藻の有性生殖を通じて次世代に片親遺伝することを明らかにしました。博士課程では、中心珪藻 *Pleurosira laevis* において、環境の塩濃度に応じて被殻形態が可塑的に変化するという、珍しい特徴を明らかにしました。この成果は日本珪藻学会第42回大会にて発表し、最優秀発表賞をいただきました。さらに、この現象に関与する遺伝子を明らかにすることで珪藻の被殻形態を制御するメカニズムにせまるという目的の下、被殻形態の異なる *P. laevis* の細胞間でトランスクリプトーム解析による遺伝子発現の比較を行いました。この成果は日本藻類学会第47回大会にて発表し、学生発表賞をいただきました。

現在は、*P. laevis* を用いた形態学研究を継続しているほか、珪藻の分類学研究もすすめており、新種記載を行いたいと思っています。また最近では、珪藻の姉妹群であるポリド藻について、分子系統解析や葉緑体ゲノム解析を行い、新目の記載論文を執筆しました。執筆にあたり、これまでのポリド藻に関する論文を精査し、大変勉強になりました。研究以外では、小中学生を対象とした野外実習や顕微鏡実習の企画運営、講師を担当する機会を何度か得ました。奈良女子大学の先生方や学生さんに大いに助けていただきながら、より良い方法を模索しているところです。

このたびの日本藻類学会研究奨励賞の受賞を励みに精進し、



藻類学の発展に貢献できるよう努めてまいります。そして、これまで多くの方に支えていただいたことを社会にしっかり還元していかなければと考えております。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

第 21 回日本藻類学会研究奨励賞を受賞して

関 莊一郎（大阪大学蛋白質研究所）

この度は日本藻類学会研究奨励賞という栄誉のある賞をいただき大変光栄です。これまでにご支援いただきました皆様方、また申請書の評価をしていただいた先生方に感謝申し上げます。

私はこれまで大阪市立大学（現、大阪公立大学）の藤井律子准教授の下で、学部4年から博士号取得まで6年間藻類の光合成色素に関して研究してきました。その中で、右も左もわからない学部4年のときに初めて参加した学会活動が、日本藻類学会第43回京都大会でのポスター発表でした。ポスターの内容はミルに照射する光照度を変えると色素組成が変わるというもので、この学会ではミルは非常に有名だったのもあり、色々な方から様々な角度のご意見を頂け、大変楽しかったのを記憶しております。この時をきっかけにポスター発表が好きになったように個人的に思います。この時の大会からしばらく COVID-19 等の影響もあり、次に参加させていただいたのは北海道大会（オンライン）でした。そこからは継続的に日本藻類学会の大会に毎年参加させていただいております。

藻類学会に毎度参加して思うことは、非常に居心地が良いという事です。その要因として考えられるのは、研究内容が非常に多様であり色々な研究者が参加しやすい点、各発表に対して皆さんがリスペクトをもって質疑応答をする点、また懇親会でも誰とでも話しやすい環境がある点にあると思います。そのような温かいコミュニティの性質が、僕のように皆



さんとは分野外の化学が専門の研究者、また研究発表でも暖かく受け入れていただける要因なのかなと。そういった経緯もあり、毎年、「また来年もぜひ来よう」という気持ちになります。

さて、今回、申請させていただいた研究内容は、「海藻類がなぜ茶色や深緑色をしているのか？」という藻類学においてある種、非常に根源的な研究テーマです。特に、この研究は元々、筑波大学で教鞭をとられていた横浜康継先生から始まっておりまして、日本発祥で非常に長い歴史のある研究であります。その色の由来は、海藻類特有の光合成アンテナが緑色の光を効率よく吸収できることにあり、分子レベルでどのようにこの緑色光吸収機構を生じているか、未だにわかっていませんでした。それに対して、我々は複数の緑藻由来のアンテナの立体構造を解明し、その分子構造の比較から緑色光吸収機構に大幅に迫ることができました。

本研究は、元々、ミルのアンテナをベースに研究を進めていたのですが、2022年にミル由来のアンテナの構造は解けたのですが、この1種のアンテナの構造を解明しただけで、その分子メカニズムの解明には至りませんでした。そこで、僕が博士2年の時の北海道大会にて、この研究を発表させていただいた結果、それに対して様々な意見を受けて、ヤブレグサとチョウチンミドロという特殊な色素組成をした緑藻に着目することができました。加えて、河地先生をはじめとした藻類学会のコミュニティを経由して、実際にそれらの藻類を入手することができ、本研究を達成することができました。このように日本を発祥として、長く続けられてきた研究に対して、日本藻類学会のコミュニティの助けもあり、大きな一石を投げられたという事を非常に誇りに思っております。加えて、この研究により学位を取ることができ、更に本研究奨励賞まで頂けたという事で、日本藻類学会に日々支えていただいていると感じながら研究させていただいております。今後、益々自身の研究を発展させていき、将来的に日本藻類学会に貢献できるように努めていくつもりです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

第28回日本藻類学会英文誌論文賞を受賞して

新井 嵩博*, 小祝 敬一郎, 野崎 玲子, 近藤 秀裕,
廣野 育生, 鈴木 秀和, 神谷 充伸
(東京海洋大学,

*現所属:北海道立総合研究機構水産研究本部稚内水産試験場)

この度、日本藻類学会英文誌論文賞を賜りましたことを大変光栄に思います。本論文は東京海洋大学大学院博士後期課程在学中の研究をまとめた論文です。当時、ご指導いただいた東京海洋大学藻類学研究室の神谷充伸先生、鈴木秀和先生、遺伝子解析についてご指導いただいたゲノム科学研究室の廣野育生先生、近藤秀裕先生、小祝敬一郎先生、野崎玲子氏に心より御礼申し上げます。また、選考していただいた審査員の皆様に感謝申し上げます。本論文の研究対象は褐藻アミジグサです。本種は同形世代交代型の生活環をとり、孢子体と配偶体が同形同大となります。成熟個体の場合、生殖器官の形態から世代や性を判別できますが、未成熟個体の判別は困難です。アミジグサでは、成熟した孢子体ばかりが観察され、成熟した配偶体がほとんど発見できないことが知られており、古くから孢子体が多いことが推測されていました。しかし、未成熟個体の世代判別ができず、正確な世代比や孢子体優占の真偽は不明でした。そこで、性判別分子マーカーを開発し、マーカーを用いて野外のアミジグサの世代・性判別をしたのが本論文です。その結果、季節や生育環境を問わず孢子体が配偶体よりも優占することが明らかとなりました。さらに、孢子体が優占する群落において、人工基質を設置し、加入してくる個体の世代や加入状況を観察する野外実験を行ったところ、基質上面には藻体が見られず、孢子体が側面から匍匐して伸長する様子が観察できました。そのため、孢子体の継続的な優占は孢子体の栄養生殖が要因であることが示唆されました。本研究では、同形世代交代型褐藻において初めて正確な世代比を明らかにできたため、非常に喜びを感じました。本研究テーマは、卒業研究の終わり頃に野外調査でアミジグサ目褐藻を観察した際に着想しました。それ以降、アミジグサ目の多くで孢子体ばかりが観察される要因を解明することを目指して掲げていたため、論文が掲載された時は達成感がありました。その一方で、世代比が算出できるようになったとしても、依然として繁殖生態については疑問点が多く、海藻の同形世代交代の研究への興味は尽きません。例えば、アミジグサの孢子体は、調査地の千葉県館山市では冬から春に成熟します。孢子体は、成熟時期に四分孢子を環境中に大量に放出しているはずなのですが、夏以降も配偶体の急増はみられませんでした。そのため、「調査地のアミジグサ孢子体はなぜほとんど機能していないと考えられる四分孢子を大量に生産しているのか？」や、「放出されているはずの四分孢子はどこへ行ったのか？」などの疑問が残されています。これらを解明できれば、アミジグサの同形世代交代を通じた繁殖戦略が明らかとなり、最終的には、同形世代交代型褐藻における有性生殖と栄養生殖のコストの関係、複相世代と単相世代の優位性についての知見が得られるかもしれません。研究に関



する詳細な内容は別頁の藻類学最前線の内容もご参照いただければ幸いです。

2024年3月に博士課程を修了し、現在は、水産試験場において海藻類の増養殖についての研究に加え、多分野にわたる水産学的研究や技術指導にも携わらせていただいております。アミジグサは北海道にも生育しているため、業務の傍ら、残された問いについても少しずつ研究を進めたいと考えております。また、赴任後から、食用となる同形世代交代型紅藻のアカバギンナンソウの繁殖生態の研究も開始しました。アカバギンナンソウの世代比や成熟状態を調べていると、アミジグサとは異なり、世代比が季節毎に変化すること、葉状部や基部が多年生である可能性などが明らかとなってきました。今後は、諸先生・先輩方のように生態学と水産学の両面から海藻の研究に邁進していきたいと考えております。引き続きのご指導、ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

第1回日本藻類学会和文誌論文賞を受賞して

貞包 和希*, 鈴木 秀和, 神谷 充伸
(東京海洋大学, *現所属:北海道大学)

この度は、「同形世代交代型紅藻ツノマタ属2種における生態と物理特性の世代間比較」の論文に対し、第1回日本藻類学会和文誌論文賞を賜り、誠に幸甚に存じます。著者を代表して選考委員の皆様にご心より御礼申し上げます。

ツノマタ属やアカバギンナンソウ属をはじめとしたスギノリ科紅藻は同形世代交代を行います。レゾルシノール試薬を用いることで未成熟個体でも容易に世代判別が可能です。この方法を用いて、これまで多くの世代比調査が行われており、出現世代が偏ることが明らかになっています。異形世代交代型海藻と比較すると、同形世代交代型海藻の世代間では物理的・生理的特性に大きな差は報告されておらず、採集地によっても世代比が変動するために、世代比の偏りを生じさせる要因については不明でした。

筆者が学部生の時に、神奈川県真鶴町亀ヶ崎へサンプリングに行ったところ、配偶体が優占するイボツノマタと孢子体が優占するツノマタが同所的に生育していることに興味を持

ち、この研究がスタートしました。群落が消失するまで両種の優占世代は変化しなかったため、種間、世代間で比較を行うことで世代比を決定する要因について検証可能と考えました。

世代間で物理的特性を比較したところ、イボツノマタ配偶体の水分含有量や破断強度が孢子体と比較して高かったことから、イボツノマタ配偶体は波浪や乾燥に対して強いと予想され、実際に干出の多い潮間帯では潮下帯よりも配偶体が増加することを確認しました。

一方、本論文ではツノマタ孢子体が優占する要因について見いだすことができませんでしたが、最近の実験により、世代間での生理的特性の違いがあることがわかりました。ストレス条件下に曝露した後、光合成活性を測定したところ、ツノマタ孢子体は低塩分に対するストレス耐性が配偶体より高いことが示されました。また、イボツノマタでは強光、乾燥、低塩分ストレス耐性や回復能力が配偶体で高く、それぞれの優占世代と一致しました。この研究成果は、日本藻類学会第49回大会で口頭発表させていただきました。本大会では多くの先生方に実験方法や解析方法についてご助言をいただき、大変有意義な時間を過ごすことができました。この場を借りてお礼申し上げます。

ツノマタ類の生態には未だ多くの疑問点が残されています。例えば、ツノマタの配偶体はほとんどが嚢果を有する雌で、雄がほとんど検出されません。また、多くの個体が成熟しているにも関わらず優占世代が変化しないことから、形成された孢子が個体群の維持にほとんど役に立っていない可能性があります。今後は世代比と繁殖生態や藻体寿命との関係性について明らかにし、同形世代交代の意義や利点を理解する一助になりたいと考えています。

筆者は、2025年度から北海道大学大学院水産科学研究院にて博士研究員として所属しております。サンプリングではウェーダーのまま海に落ちないように注意しつつ、他の海藻種にも注目し遺伝子発現解析など新しい分野にも挑戦したいと思います。日本藻類学会の皆様には、引き続きご指導ご鞭撻

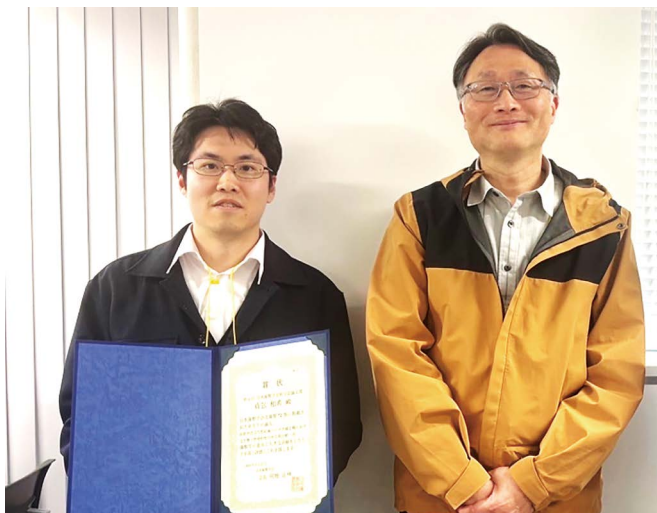
のほどよろしくお願いいたします。

日本藻類学会第49回大会学生発表賞口頭発表（大型藻）の部を受賞して

鶴亀 里咲（東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科）

この度は、口頭発表大型藻の部において学生発表賞を賜りましたこと、大変光栄に存じます。このような賞をいただいたのも、日頃より大変手厚くご指導くださる神谷充伸先生や鈴木秀和先生をはじめ、性状分析の実験指導と機器を提供いただいた東京海洋大学水圏生態化学研究室の神尾道也先生のお力添えゆえです。また、学部3年次より多大なご指導とご協力を賜りましたお茶の水女子大学基幹研究院の畠田智先生や北海道大学水産科学研究院の秋田晋吾先生、採集等で幾度もお世話になりました北海道大学室蘭臨海実験所の長里千香子先生や本村泰三先生、さらに発表資料作成などの面で貴重な意見をくださった所属研究室の皆様にも、心より感謝申し上げます。

今大会では、「褐藻カジメ属雄性配偶体から分泌される卵形成促進物質の解明」という演題で発表いたしました。私はこれまでコンブ類の配偶体の配偶子形成を中心とする生理生態について研究してまいりました。雌性配偶体の卵形成率だけではなく、受精率も算出するために雄性配偶体との共培養をしていたところ、単独培養時よりも共培養時の方がわずかに卵形成率が増加する傾向にあることに気づき、これをきっかけにして本研究に着手しました。ちょうどその頃、趣味で様々な種の配偶体を掛け合わせて交雑体を作製していたため、試しに異種の雄性配偶体とも共培養してみたところ、同種の雄性配偶体との共培養時までには至らないものの、わずかな卵形成率の増加傾向が見られました。この結果を目の当たりにした時は大変興奮して、話半分で聞く神谷先生に居酒屋で力説したことを今でもよく覚えております。これより、雄性配偶体が卵形成を促進する何らかの物質を分泌している可能性を考えて物質分泌の時期やその性状を分析したところ、雄性配偶体の成熟に伴い物質分泌が見られることや、物質が揮発性である可能性が考えられました。今後も更に分析を進め、物



質を含む分画の精製などを行っていきたいと考えております。

1つの培養実験を終えるのに約1ヶ月を要する中、培養株のコンタミネーションと戦いながら何度も実験をやり直したり、株が突然配偶子を形成しなくなるといった問題に悩まされたりと苦勞の連続でしたが、腐らずに先生方と共に一步步実験を進められたことは自身の大きな喜びであり、確かな自信と成長に繋がりました。コンブ類の研究には長い歴史がありますが、配偶体の野外での動態など未解明の点も多く、謎に満ちた興味深い生物だと感じております。本研究がコンブ類の繁殖戦略の解明に少しでも貢献できることを願ってやみません。

最後になりましたが、本学会会長の河地正伸先生や、開催地である琉球大学の先生方をはじめとする大会実行委員の皆様、ならびに本発表に対して多くのご助言やご質問を賜りました皆様に心より感謝申し上げます。頂いたお言葉を胸に刻み、今後の研究活動に一層励んでまいりますので、引き続きご指導ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

日本藻類学会第49回大会学生発表賞口頭発表（微細藻）の部を受賞して

城間 尚（琉球大学理学部）

この度は日本藻類学会第49回大会学生発表賞を賜りましたこと、誠に光栄に思います。このような名誉ある賞をいただくことが出来たのも、日頃より熱心にご指導いただいた田中厚子先生や共同発表者の江口陽菜さん、Bruno Humbel 博士をはじめご指導ご協力いただきました皆様、そして研究室の皆様のおかげです。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

今回は、「珪藻 *Phaeodactylum tricornutum* におけるゴルジ体の形態と複製様式」というテーマで発表させていただきました。ゴルジ体は細胞内でタンパク質や脂質などの修飾と選別を行うオルガネラです。ゴルジ体の形態や複製様式に関する研究は動物や陸上植物、緑藻の一部などで行われてきましたが、緑色系統以外での報告は非常に限られていたため、不等毛植物門に属する珪藻のゴルジ体が細胞内でどのように存在し、複製されるのかを明らかにすることを目的として本研

究を進めてきました。多様な顕微鏡を用いた観察の結果、ゴルジ体が細胞内で核に隣接して1つ存在し、細胞周期の特定のタイミングで2つに複製されることが分かりました。さらに本種ゴルジ体においては、複製途中と考えられるゴルジ体の形態として、シス側のシスターネ中央部に穴が形成されていることを明らかにし、1枚のシスターネが何かしらの影響で2つに分かれる可能性が示唆されました。ゴルジ体の複製様式に関しては動物細胞では有糸分裂前にゴルジ体が小胞化し、娘細胞に分配された後にゴルジ体の構造が再構築されることが知られていますが、植物においてはどのようにゴルジ体が複製されるのかについてまだ明らかになっていません。今回は珪藻の1種における知見にはなりますが、ゴルジ体の複製様式の新たな可能性について報告できたことは、今後のゴルジ体に関する研究に役立つのではないかと期待しています。今後はゴルジ体の複製が細胞周期の進行に必須なイベントであるのかといった疑問や、ゴルジ体の複製がどのように制御されているのかについて更に研究していきたいと考えています。

最後になりますが、今回初めて藻類学会で発表させていただき、たくさんの方にご清聴いただきました。また発表での質疑応答のみならず、学会参加中にも多くのご助言・ご質問をいただきました。このように、指導教員以外の方から研究に関して直接コメントをいただく機会というのはあまり多くないことでしたので非常にありがたく、これからの自身の研究を進めるにあたってとても貴重な時間でした。まだ研究を始めて1年半であり、未熟で至らない点も多くありますが、今回の受賞を励みに修士課程での研究に邁進してまいりますので引き続きのご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。この度は本当にありがとうございました。

日本藻類学会第49回大会学生発表賞ポスター発表（大型藻）の部を受賞して

植木 理子（佐賀大学大学院農学研究科）

この度は、日本藻類学会第49回大会学生発表賞を賜りましたこと、大変光栄に思います。このような名誉ある賞を頂きましたのも、日頃より熱心にご指導くださった木村圭先生（佐賀大学）をはじめ、貴重なご助言を賜りました吉田和広先生（佐賀大学）、ご協力いただいた関係者の皆様、そして共に学ぶ学生の皆様のおかげです。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

今大会では、「スサビノリ胞子嚢の成熟現象の理解」というテーマで発表させていただきました。ノリ養殖では、糸状体（胞子体）上の殻胞子嚢から放出された殻胞子を養殖網に付着させ、ここから成長した葉状体（配偶体）を育てることで生産を行います。そのため、殻胞子嚢成熟から殻胞子放出までの過程を適切に制御することは種付け作業に大きく関係し、ノリ安定生産において重要な技術と考えられています。現在のノリ養殖では主に水温管理によって成熟制御が行われていますが、近年では赤色光照射によって殻胞子嚢成熟を抑制できる可能性が報告されています。しかしながら、その具体的な抑制メカニズムは未だ解明されておらず、本研究では、殻胞





子嚢の成熟現象の解明を目的に、詳細な形態観察による成熟の定量化および遺伝子発現解析を用いて調査を進めてまいりました。その結果、殻胞子嚢の成熟は、成熟段階に関係なく赤色光によって抑制されること、さらに *PyKNOX* という遺伝子が殻胞子嚢の成熟に関わる細胞分裂に関与している可能性が示唆されました。しかし、まだまだ未解明の点も多く残されており、今後は、これらの知見をさらに深め、殻胞子嚢成熟のメカニズム解明に向けた基盤的研究として発展させていきたいと考えております。

最後に、今回初めてポスター発表に参加し、多くの方に本研究へ関心を寄せていただき、大変ありがたく感じております。また、さまざまなご助言やご質問を通じて、多くの学びを得ることができました。このような貴重な場で皆様と議論できたこと、そしてこのような名誉ある賞を受賞できたことは、今後の研究活動への大きな励みとなりました。いただいたご意見を真摯に受け止め、今後の研究に活かしてまいります。この度は、誠にありがとうございました。

日本藻類学会第49回大会学生発表賞ポスター発表（微細藻）の部を受賞して

中村 翠（京都大学大学院農学研究科）

この度は、日本藻類学会のポスター賞を賜り、大変光栄に存じます。本研究を進めるにあたり、ご指導いただいた京都大学の伊福健太郎先生をはじめ、共同研究者の皆様、そして日頃から支えてくださった研究室の皆様に心より感謝申し上げます。

今大会では、「海洋珪藻 *Chaetoceros gracilis* の光および CO_2 に応答した集光機能の調節」というテーマで発表を行いました。珪藻は海洋において重要な一次生産者であり、その光合成効率を高めるための集光機能がどのように環境応答するかを明らかにすることは、藻類の生理学的理解を深めるうえで意義のある研究です。本研究では、特徴的な条件で誘導される集光性色素タンパク質（LHC）に着目し、異なる光環境や CO_2 濃度において、本 LHC の発現変動や欠失変異体および強制発現株による光合成活性の変化を解析し、*Chaetoceros*

gracilis がどのような適応戦略をとるのかを調べました。その結果、珪藻が光強度や CO_2 濃度の変化に応じて集光機能を動的に調節することが示唆されました。

学会では、多くの研究者の方々と意見交換をさせていただきました。特に、貴重なご助言やご指摘を賜ることができました。特に、異分野の視点からのご意見や、これまで考えもしなかった新たなアプローチについての示唆をいただき、自身の研究をより広い視野で捉える契機となりました。また、熱意あふれる議論を通じて、今後の研究の方向性についても具体的なアイデアを得ることができ、大変有意義な時間を過ごしました。このような貴重な機会を提供してくださった学会関係者の皆様、および研究のディスカッションに、改めて深く感謝申し上げます。

私は日本藻類学会が初参加だったのですが、以前から憧れていた藻類研究者の皆様と直接お会いし、お話を伺うことができたことも大変嬉しく、貴重な経験でした。皆様の情熱的な研究姿勢や深い知見に触れ、大いに刺激を受けました。私もいつか皆様のような研究者になれるよう、今後も一層努力を重ねてまいります。

今回の受賞を励みに、引き続き研究に精進し、珪藻の光合成メカニズムの解明に貢献できるよう努めてまいります。

最後になりますが、本学会の運営にご尽力いただいた関係者の皆様、そして私のようなまだまだ未熟な学生にも温かく声をかけてくださった皆様に深く感謝申し上げます。今後ともご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。この度は本当にありがとうございました。

日本藻類学会第49回大会学生発表賞ポスター発表（微細藻）の部を受賞して

森本 冬海（甲南大学大学院自然科学研究科）

この度、日本藻類学会学生発表賞ポスター発表「微細藻の部」を賜り、誠に光栄に存じます。前大会での口頭発表に引き続き、今回の大会ではポスター発表でもこのような名誉ある賞をいただけたことを、大変嬉しく思っております。これもひとえに、日頃よりご指導いただいている共著者の皆様、ならびに甲南



大学の皆様をはじめ、親潮広域調査にご協力いただきました水産資源研究所寒流第一・第二グループの皆様、また、調査船「北光丸」「若鷹丸」の船員・調査員の皆様、さらには大阪湾浅海調査にてご協力いただきました大阪府環境農林総合研究所の皆様および調査船「おおさか」の船員・調査員の皆様、多くの方々のご支援のおかげと、心より感謝申し上げます。

今大会でのポスター発表「原生生物ラビリントウ類の海洋生態系の DHA 転送における影響力」では、前回の発表に引き続き、所属する系統分類学研究室の大きなテーマの一つである「海洋魚類のドコサヘキサエン酸（DHA）の起源」に

ついて、昨年度に頂戴した様々なご意見やご指摘をもとに、さらに考察を深めた内容を提示しました。現場の海水中における予想される DHA の現存量の内訳と、カラヌス目カイアシ類によるアプラノキトリウム類の積極的な捕食の事実に基づき、実際に微生物から魚類へと提供される DHA のその内訳と、その流路と流量を予測した結論をまとめました。未だ注目されていないアプラノキトリウム類ですが、DHA 供給者として海洋生態系に大きく貢献している可能性を、聴いていただいた皆様に印象づけられたことが、今回の受賞に繋がったのではないかと実感しております。

1 時間の間、多くの方々と活発な議論を交わすことができ、大変実りある発表となりました。口頭発表と比較して議論の密度は高く、私の考察に対し率直なご意見を多く頂戴する貴重な機会となりました。このように、発表の場で注目いただける機会が増えたことで、研究室内でもラビリントウ類の生態学に興味を持ち、研究する学生が徐々に増えつつあります。

また、発表を聞いてくださった皆様からは、「DHA といえば魚類だと思っていたが、新しい視点だった」とのご感想も多くいただき、藻類分野のみならず水産分野の方々にも「ラビリントウ類は面白い」と興味を持っていただけたことを、大変嬉しく感じております。このように、研究室内外問わずラビリントウ類への関心が高まりつつある現状を大変心強く、嬉しく思っております。今年こそは博士課程を卒業できるよう、一層励んでまいります。